



校訓：至誠一貫 学校教育目標：自ら学び、自ら行動し、互いを認め合う生徒の育成

令和8年度西有田中学校だより

第12号(2026.9.15)

文責：中尾 恵子

挑戦・仲間

PISA2025 から考えること

9月にOECDから国際学習到達度調査結果が公表されました。「PISA2025」(15歳＝高校1年・中学3年相当が対象)の結果を基に、日本の生徒(主に中学生・15歳)における学力の成果と今後の改善点は以下のとおりです。

○全体像：国際的には引き続き「トップクラス」
日本はOECD加盟国の中で3分野(読解力・数学・科学)すべて1位を獲得し、世界最高水準の学力を維持している一方で、前回(2022年調査)と比べて得点低下が見られる分野もあり、新たな課題が浮き彫りとなった。

○浮き彫りになった「3つの主な課題」

- ・読解力の低下と「長文・根拠提示」の弱さが見られ読解力の平均得点が前回調査より13点低下した。

→ 短文の理解は得意な反面、複数の資料や長文を比較しながら「自分の言葉で根拠を示して説明する」設問に弱みが見られる。

○「低得点層(基礎学力未達層)」の増加

- ・高得点層が安定している一方で、基礎的なレベルに届かない生徒(低得点層)の割合が上昇傾向である。

→ 特に男子の読解力において低得点層が目立つ。

→ デジタル・AIツールの活用不足と主体的な学びデジタル端末を使った学習環境は整いつつあるものの、授業での生成AIなどのICTツールの活用頻度はOECD加盟国中で最下位レベルにとどまっている。

- ・「学力は高いが、学習に対する探究心や自己調整力(主体的に学ぶ力)が不足している」生徒の割合が国際平均に比べ低い。

○今後に向けた「改善点と対策」改善テーマ具体的なアクション(学校・家庭での工夫)

- ・読解力・記述力の強化として、単に文章を読

むだけでなく、「なぜそう考えたか?」の根拠や理由を記述させる習慣付ける。

- ・図表や複数の文章を組み合わせる情報を読み取る練習を増やす。

- ・基礎学力の底上げ低得点層への個別最適なサポート(補習や個別の理解度に応じたデジタル教材の活用など)を強化し、学習の取り残しを防ぐ。

以上の内容は本校生徒にも当てはまるものも多く、御家庭での御協力をお願いします。

「学習」と「勉強」の違い

「学習」と「勉強」は同じように見えて、実は「やる目的」と「範囲の広さ」が大きく違います。学習は「人生を豊かにする広場」、勉強は「目的を果たすトレーニング」と言えます。

学習(がくしゅう)とは?

意味：学んで(真似して)、練習して自分の力にすること。

特徴：教科書だけでなく、部活の技、ゲームの攻略法、友だちとの付き合い方など「自分が成長すること全般」が入る。
自発的に楽しくやることが多いのも特徴である。

勉強(べんきょう)とは?

意味：元々は「勉めて努力する」という意味

特徴：定期テストや受験など「決められた目標をクリアするために、ちょっと大変でも努力すること」をさす。知識や解き方を正確に頭に入れる作業である。

「勉強」は「学習」という大きな枠組みの中にあり、実力を伸ばすための集中的なトレーニングです。学校で取り組んでいる「勉強」や「学習」は、将来のための武器(知識や考え方)を集めている状態と言えます。